

ソクラテ斯的対話法、心理療法、そして文学言語の戦略

—Don DeLillo, *White Noise* (1985) 第37章を分析・考察する—

中 谷 ひとみ*

1. 再生の鍵としての新しい<物語>

現代は、人間が自ら作り出す美しいまでの科学文明に酔いしれ、永久に大量生産・消費様式を享受できる豊かな時代のように思える。しかし、小説『ホワイต์・ノイズ』の主人公Jack Gladneyは有毒化学物質流出事故でほんの数分外気の有害物質に曝されたことから、医者によれば「専門的に言えば、死んでいる。」(158) 小説は、確実な死に対する恐怖に苛まれる主人公の、死の恐怖からの「自由と自己創出 (“freedom and self-creation”）」(Boxall 128) を描く。死と恐怖の<物語>に捕縛されたジャックが、愛する家族と十全な生を生きるには、別の<物語>が必要である。彼が到達したのが、死は運命づけられているとしても、いかに死の恐怖に苛まれようと、尼僧に罵倒されて神や天使や天国という希望の<物語>や信仰を否定されても、そして転変する世界に何が起ころうとも、世界は、そして生きることは「美しい」(320) という<物語>である。¹ この<物語>の人生に対する肯定的な見方なしでは、死の恐怖と絶望の淵から一歩も外へ出られない。主人公は最後には、世界をありのままに受容しているようだ。<美>の認識の変化、美ということはば・概念に新しい<物語>を見出したと言ってもよからう。ジャックの新しい<物語>への帰着と世界の肯定的受容に寄与したのが、第37章のMurray Jay Siskindとの「ソクラテ斯的散歩」(282) における会話と、第39章におけるWillie Minkとの演劇的そして空想的(imaginaryかつimaginativeな)会話である。二つの章での興味深い文学的手法が読者の注意を惹く。主人公の<物語>への帰着はこれら二段階の会話を経て、そしてその後現実世界に立ち戻り、最終的に達成される。修行などによって宗教的智慧が身体知として得られ、その後生活世界に戻ってそれが生かされて、生が宗教的に完結するのと同様である。本論ではソクラテ斯的対話や心理療法の言説と比較しながら、第37章における作者の言語戦略を明らかにしていきたい。第39章の分析は本論に引き続き、稿を改めて行う。

ジャックの絶望と機能不全になぜ<物語>すなわち言葉が有効なのか。関一敏は「『(過剰な) ストレスを発散』したり、「(過剰な) 秩序に疲弊した生命」を回復させる「文化装置」として、二

* 岡山大学大学院社会文化科学研究科教授

1 拙論「死の恐怖の乗り越え、物語の乗り換え—Don DeLillo, *White Noise* (1985) のポストモダン世界と自己形成」(岡山大学大学院社会文化科学研究科、『文化共生学研究』第14号(2015) pp. 71-87) では、主人公の「自由と自己創出」を<物語>という点から論じた。本論はこれを発展させたものである。第39章を分析し、dramatization, dramatic dialogue/monologueあるいはimaginary conversationと現実の二元論的対立の止揚などの文学的作法は、『岡山大学文学部紀要』第64号(2015.12)で行う。

つ挙げている。(1) 身体とその感覚：分節世界からおのずとはみ出してしまう力を活用する（身体動作、連続性の回復）で、スポーツ、武道、踊り／性／音楽／忘我（トランス）／祭りである。そして(2) コトバの流用：分節世界の要であるコトバを流用すること（異化作用）で、詩的言語（矛盾形容、譬喩）／冗談と笑いである。（片岡 他編 188-89）(1) は「身体のもつ感覚性とそこにもともと備わっている『混沌』の力」を歯止めをかけながら開放することであり、(2) は「コトバを用いながら、コトバの分節作用をずらすところみである。」(190)。医者と言では「死んでいる」主人公ジャックも、「原初の力を回復」(188) すれば再生できるかもしれないのだ。彼の回復を論じるにあたり興味深い点は、関の分類にもあるように、「忘我」と、「コトバの異化作用や詩的言語」が有効だったことである。前者は理性の縛りから解放されることであり、二元論を超えた言説や世界に入り込むことである。後者は作家の文学言語や小説作法の戦略として、本論および第39章の分析で考察するものである。

名づけることはすでにある物事を発見する手立てとなるが、わかったような気になったり、レッテルを貼ることによってより深く理解することを妨げることにもなる。確かに、「厳しい嫉」や「ひどい夫婦喧嘩」とされてきたことが、「児童虐待」や「DV (domestic violence)」という新しい名づけを通して、犯罪的暴力であるとその実態が認識されるようになった。（斉藤 34参考）一般的に、言語化にはこのような利点も危険性もあるが、強烈なトラウマがあれば、それを言語化・記憶化することによってそれから脱出できると言われる。「トラウマ的記憶を物語的記憶に変換すること…トラウマ的過去を物語ること」には沈黙や抵抗が付随するが、それは「『過去の生き直し』」すなわち「『行動化』が起こっている」（栗原 他編 171）ことを示す。死の恐怖におびえるジャックにとって、「今・ここ」の自分の筆舌に尽くしがたい不安や絶望や願望が、言葉によって定着されて始めて明瞭になる。＜物語＞になったそれらを改めて見つめることができれば、苦も受容可能となる。死の恐怖ではない新しい＜物語＞を言語化し、強迫観念だったかつての＜物語＞を記憶のなかに定着させることは、彼の再生の鍵となるのだ。

正午に始まり、ジャックが半時間のそぞろ歩きと予想したマレイとの散歩は、「午後の大部分をすごす、真剣で輪をなす（回帰する）ような、実用的な結果をもたらすソクラテスの哲学散歩になった。」(WN 282) ジャックの長い対話の相手マレイは「僕は君がすでに持っている真実を、何らかの基本的なレベルで君がいつも気づいている真実を引き出したいだけだ」(293) と述べているから、ソクラテスの対話術を想起するのは自然であろうが、この散歩は、彼の＜物語＞の言語化を手助けすることになる。「トランスを有意にするために指導者の手引きと自律したコントロール」（片岡 他編 189）が必要であるのと同様に、そして禅の修行でも師が不可欠であるのと同様に、ジャックには師・マレイが、彼との対話／会話が必要であった。しかし、ジャックが語るように、二人の哲学散歩は「輪（“loop”）」であり、彼は起点に戻って、ある種の「自らのコントロール」によって＜物語＞に到達せねばならない。これが、第39章で描かれる、日常の異化（dramatization）と、

内的旅 (inward journey) としての想像的かつ創造的な文学的言説 (imaginary/imaginative conversation) などの手法である。ただし、ジャック自身がそのことを意識して行ったわけではあるまい。マレイの巧みな誘導があったのであるが、マレイ自身もそれを意識的に行ったわけではなかろう。これも作者の文学的戦略と言ってよい。

2. ソクラテスの対話術

「ソクラテスの哲学散歩」とは言うものの、紀元前のはるか昔の人であるソクラテスが実際はどんな人で、どんな考えを持ち、何をなしとげたかを正確に知るのは至難であろう。本論は先行研究に負うところが大きい。古代哲学概説書や一般的研究書によると、ソクラテスは当時の「人々と対話を交わし、『魂』ができるだけ善くなるように配慮すること、すなわち『^{アレテー}徳の配慮』を促」(納富 67) した。「人間にとっていちばん大切なものは徳であり、正義であり、したがってまた法に従うことであり、国法である。ソクラテスの対話の話題は、いつも、正義や敬虔や勇気や節制などの『徳』についてであった。」(三嶋・田中 訳 171) 大事なのは「生きることでなくて、よく [正義しく] 生きること」(137, 138; 正義などソクラテスの要諦については、岩田『ギリシア思想入門』第8章も参考になる) である。「人間にとって最も大きな善いことは…日々徳について…論じることであって、他方、吟味を欠いた生というものは人間にとって生きるに値しない」(73-74: 38a) のだ。ソクラテスのエレンコス (論駁、吟味) の目的は「善、美、正義などに関する『真実』の探究」であり、「政治権力への入場券を得るために人々の心を動かすことを目的とする」(岩田『ソクラテス』93) 弁論術とは異なる。

「問いをもって開始される」ソクラテスと対話相手の探求は、「端緒となる問いとそれへの答え、そしてアポリア、さらにそのアポリアからの問いという運動」(田中 193) である。岩田は「エレンコスの論理構造」を以下のように説明する。

- (1) 答え手である対話者 (A) が命題 P を主張する。P は、ソクラテスが討論の主題として選んだ倫理的なテーマに関する A の主張である。ソクラテスは P を検討の主題とする (P を虚偽であると見なし、反駁の標的にする)。
- (2) ソクラテスは A に幾つかの命題 Q、R、S を提示し (提示される命題は、単独であることもあり、複数の命題の連鎖であることもある)、これらを承認するかどうかを問う。この場合、ソクラテスは Q、R、S を出発点 (土台) として議論を展開するのであって、Q、R、S を基礎付けようとして議論するのではない。これらの Q、R、S なる命題は、決して特殊専門的な知識ではなく、むしろ大抵はあまりにも自明的なものなので、もし答え手がこれらを否定すれば、かれは非理性的であるか非常識であると見なされることを免れえないような、そういう種類の命題である。そこで、答え手 A はこれらを承認する。

(3) すると、命題の結合体「Q・R・S」は「非P」を導出するとソクラテスが論証し、Aはそれにも同意せざるをえない。

(4) そこで、非Pは真であるから、Pは偽である、とソクラテスが主張し、Aは反駁される。

(『ソクラテス』102-3)

このような論理的戦略でソクラテスは、対話相手の思考を活性化させ、彼の「信念の不整合性を露呈」させ、それらが「偽であることを立証」(103)する。ジャックが「ソクラテス的」(WN 282; 下線筆者)と言うように、マレイとの対話/会話はソクラテスの対話術そのものとは異なる。徳を論じ、実践することは、彼らには無縁と言ってよい。小説で描かれるのは、科学技術が高度に発達したため生のありようも、そして社会や他の人間との関係性も異なるようになったポストモダン時代の、不条理な死の恐怖におびえる人物の自己と人生の再生である。時代的背景やエレンコスの目的も異なるから当然であろう。

3. 悩める者を師はいかに導くか—第37章分析

有毒化学物質流出が原因で不条理な死を宣告されたジャックと、マレイはどのような会話をするのだろうか。会話内容を順に吟味してみよう。

死の恐怖という本題に入り、最初に二人の会話の俎上に載せられた疑問が、ジャックの「なぜ私たちは死について知的・客観的になれないのか？」(282)である。むしろ自らに対して「なぜ…」と、何度も彼が質問し、理由を問いながら、会話は進む:「自分はなぜ、恐怖を長く持ち続けているのか？」(288);「なぜ〔二歳ほどの幼児で無垢の権化とも言える息子の〕Wilderといると気分がいいのだろうか？」(289) それらから、「死から逃れられないことは明白だから、我々はそれを抑圧し、隠蔽し、埋没させ、排除する。他の人よりそれをうまくやれる人もいる」とマレイに言われて「どうすれば(How) うまくやれる？」(288)や「どんなふうに(In what way) ワイルダーは制限・限界というものがなく、自由でいられるのか？」(289)という質問に、それぞれ発展していく。具体的方法に関する疑問である。マレイも、「なぜ君は死の恐怖のコントロールに失敗したのか？」(288)と質問する。「なぜ」と問われても、答えを出すのは困難なものである。二人の間で、理由を問う質問(Why)が方法や過程やプロセスを問う質問(How)に深められながら、またより具体的になりながら、会話が進展していくことがわかる。

ところで、たとえば癌を宣告された多くの人はまず、「何も悪いことをしていないのになぜ自分が癌になるのか、不公平だ」と思い、絶望、悲嘆、憤慨に暮れるそうである。同様の気持ちを抱くジャックに対してマレイは、不公平感、自分の死が早すぎる死であること、自分は「生きたいのだ」という本当の切実な気持ち—〈物語〉—を彼が言語化することを促す。

“Do you think it's unfair?” he said.

“Of course I do. Or is that a trite answer?”

He seemed to shrug.

“Look how I’ve lived. Has my life been a mad dash for pleasure? Have I been hellbent on self-destruction, using illegal drugs, driving fast cars, drinking to excess? A little dry sherry at faculty parties. I eat bland foods.”…

“Do you think your death is premature?” he said.

“Every death is premature. There’s no scientific reason why we can’t live a hundred and fifty years. Some people actually do it, according to a headline I saw at the supermarket.”

“Do you think it’s a sense of incompleteness that causes you the deepest regret? There are things you still hope to accomplish. Work to be done, intellectual challenges to be faced.”

“The deepest regret is death. The only thing to face is death. This is all I think about.

There’s only one issue here. I want to live.” (283)

死ぬ運命にあるが本当は生に強く執着しているジャックは、どうすれば十全に生きることができるのか。マレイは死の恐怖克服のための、理論的に可能な方策を呈示する：「テクノロジーを信じる」/「生を超えたものに集中する、[つまり] 再生、輪廻、超宇宙、死者の復活などの本を読む」/「偉大な詩、音楽、ダンス、死を超えた生への熱望から沸き起こる儀式を考える」/「死後の生について考える。」(285-86) その後で彼は、死後の生をどんなものと考えerかは別として、「君がしなければならないことはどんな暗殺計画からも生き残ることだ」(286) と断言する。彼が真にしなければならないことは生きることであると明示し、勇気付けようとする。死の恐怖の可能な克服法を提示しながらであるから、具体的で説得力がある。

しかし、次の件からはマレイの最も興味深い言語戦略がうかがわれる。「ここ数年、君は何をしようとしてきたのか」と問われ、「自分に魔法をかけていたと思う」と答えるジャックに対し、彼は「恥じることはない、君にこういう行動を取らせているのは、ただの君の恐怖なのだから」(287) と答えて、ジャックを憤慨させる。

“What have you been trying to do all these years?”

“Put myself under a spell, I guess.”

“Correct. Nothing to be ashamed of, Jack. It’s only your fear that makes you act this way.”

“*Only* my fear? *Only* my death?” (287)

マレイが「*単なる*君の恐怖、*単なる*君の死」と言うのは、「自分に魔法をかけていた」自己欺瞞に気がついたジャックに彼の苦悩を相対化させようとする試みであろう。絶対化している限り、自分の苦悩しか見えず、耐え難さはつのるばかりだ。この点で、苦悩を相対化させようとするのは意味のあることだが、自分の苦悩を卑小化するマレイに対するジャックの怒りの強い語調から、彼の気

持ちが意図せずして吐露されたと考えられる。笑いの効用についてはよく言われているが、このような怒りにも、重要な効用がある。自分を護り、結果的には事態に立ち向かい前進するエネルギーとなるのだ。ただし、マレイがこのことを知ったうえでの挑発的発言だったかは不明である。むしろ否であろう。

死の恐怖をコントロールすることに失敗した原因が「混乱した方法」(288)にあったこと、そして自分が愚かであったことを、ジャックは自ら認める。「死に打ち勝つには多くの方法があるが、君はその二つを同時に試みようとした。…そんなことを何と言う？」と問われ、「愚かな行為 (“Dumb”）」(288)と客観的に自己評価を下しているからである。「愚か」という言葉と共に、彼の問題が明確になっていく。さらにマレイは、恐怖をありのままに受け入れよと説得にかかる。そしてクライマックス、二人の会話の話題は死に打ち勝つ他の方法に戻るが、マレイの考えは、理論上とはいえ、いささか過激である：「人間は歴史的に見て、他人を殺すことによって、自らの死を癒してきた。暴力は再生の一形式である。存在するんだ、ジャック。殺人者は、理論的には、他人を殺すことによって自分自身の死に打ち勝とうとする。殺すことは究極的に優位に立つ方法だ。殺して、生きろ。」(290-91)

“I’m talking theory. In theory, violence is a form of rebirth. The dier passively succumbs. The killer lives on. What a marvelous equation. . . . Nothingness is staring you in the face. Utter and permanent oblivion. You will cease to be. *To be*, Jack. The dier accepts this and dies. The killer, in theory, attempts to defeat his own death by killing others. He buys time, he buys life. Watch others squirm. See the blood trickle in the dust.”

I looked at him, amazed. He drew contentedly on his pipe, making hollow sounds.

“It’s a way of controlling death. A way of gaining the ultimate upper hand. Be the killer for a change. Let someone else be the dier. Let him replace you, theoretically, in that role. You can’t die if he does. He dies, you live. See how marvelously simple.”

“You say this is what people have been doing for centuries.”

“They’re still doing it. They do it on a small intimate scale, they do it in groups and crowds and masses. Kill to live.”

“Sounds pretty awful.” . . .

“To plot, to take aim at something, to shape time and space. This is how we advance the art of human consciousness.” (290-92)

「理論的には」と何度も念を押しながら語るマレイに対し、ジャックは何度も「驚いて彼の顔を見」たり、あきれて「ずいぶんひどいね」(291)と言う。また、半信半疑で「確かい？」(292)と聞いたりもする。前述した、死の恐怖を乗り越える方法同様、マレイの言は可能性の網羅的呈示にすぎないのだが、論理的である。人が他者を殺して自らの死の恐怖を克服してきたことは、確かに歴

史が証明している。実践することは道徳的に是認できないにしても、論理的であり、納得できる部分があることは否定できない。しかし、この場面で重要なのは、一つはジャックが驚き、あきれながらも、死の恐怖の克服法として、まったく想像外の方法があることが示唆され、陰謀と殺害という方法がクローズアップされることである。最後に言われたことに焦点が置かれ、ジャックの心に強く残る。またこの時、「陰謀を企て、目的を持ち、時空間を構築することが、我々人間が自分たちの意識というアートを前進させる方法である」(292)という考えに洗脳されていくことも忘れてはならない。こうしてジャックは、死の乗り越えと新しい<物語>への乗り換えの次の段階に進む。第39章である。37章では、マレイが彼に死の様々な乗り越え方法の選択肢を提示しただけである。何を選択しようとも、その責任はジャック自らが負わねばならないことになる。

以上、第37章における主要な、そして興味深い説得法としての言語戦略を検討してきたが、その他の戦略も含めて、ここでまとめてみよう。

(1) Why, How, そして会話全般に見られる Yes-No question を適宜うまく使い、二人のあいだで思索・会話が深まっていく。Yes-No question は、二者択一の思考を促がして物事の実態を単純化するという難点もあるが、考えるきっかけになったり、答えやすい利点があるために、より深く考えることが可能になる。

(2) 「うまいことを言う」(283) など、マレイはジャックを褒めて、彼が自分自身に対する肯定的評価を維持するよう、気を配る。

(3) 「それが君のいう意味？」(282) などと、あるいは「～なんだ」と付加疑問文を多用しながら、ジャックの気持ちや考えを確認しながら、また本音を代弁しながら、マレイは話を進める。

(4) マレイは驚愕、憤慨、興奮させる内容について言及するが、挑発的とも思えるほどである。

(5) 会話の佳境に入り、マレイは死の恐怖の乗り越えのための理論的に可能な方法を網羅して提示する。倫理的に受け入れられるか否かは別問題であるが、その選択はジャック自身の責任でなされねばならないことになる。選択した時点で、ジャックは行動する主体として再構築される。

マレイの、そして小説の言語戦略は以上のように考えられるが、ジャックと会話のキャッチボールをしながらも、全体的にマレイの言説は自律的である。彼は彼自身の立場から、一貫して論理的にジャックの個別的な死の恐怖の問題を考えている。その際、合理性・論理性を最大限に利用している。非常に印象的なのは、時に挑発的とも見える、故意に彼を激怒させるような言動であり、この時ジャックは、理性を失うほどの忘我の状態にあると言ってもよからう。「身体のもつ感覚性とそこにもともと備わっている『混沌』の力を」(片岡 他編 190) 開放し、「原初の力を回復」(188) して再生する可能性が出てくる。

4. 心理療法の言説

「僕は君がすでに持っている真実を、何らかの基本的なレベルで君がいつも気づいている真実を

引き出したいだけなんだ」(293) というマレイの言から、ジャックはクライアント、マレイは心理療法士、あるいはカウンセラーのようである。これらの言語戦略と小説における文学的言語の違いは何であろうか。森岡正芳によれば、心理療法やカウンセリングの臨床における「物語には治療的な働きがある。何より、語り手も聞き手も、物語という形式を通じて混乱し断片的にしか対処できなかった出来事や対人関係の表象を、まとまりをもった一つの体験として包括的に受け取ることができる。」(北山・黒木 編 151) クライアントにも心理療法士/カウンセラーにもまだ部分的にしか明らかでない問題を＜物語＞として言語化して語ることによって、明らかにするのだ。マレイも、ジャックが何らかの基本的レベルでは気づいてはいるが言葉には表せない、あるいは無意識に抑圧している真実の＜物語＞の全体像を明らかにしたいと思う。目的は同じなのだ。

＜物語＞は複雑である。しかも様々な＜物語＞が幾重にも重なり、関わりあって我々の生が営まれるから、言語で分節的にそれを語ろうとしても、全体像はつかめない。それではどう語ればよいのか。どんなことばであればよいのか。語り手は、そして聞き手はどうあればよいのか。一つひとつの事柄・要素を語れば＜物語＞全体が現れてくるわけではない。部分の総和が全体になるわけではない。全体は部分の総和以上である。となれば、我々が注目すべきものの一つが、ゲシュタルト療法とその言語観であろう。この療法では過去を問題にするのではなく、クライアントが「今・ここ」で「何を」「いかに」語るかを問題にし、彼/彼女がそれに気づき、自己について覚醒するのである。人間の統合された全体性を重要視する(パールズ; 倉戸 監訳 22など参考)から、心身二元論に立脚する伝統的医学や心理療法とは異なる。複雑な人間の自己認識も、錯綜した世界の現実・実態を語ることも同じ手法が必要だとすれば、ゲシュタルト療法の方法や言語観が参考になるかもしれない。

この療法を始めたFrederick Perlsは、「からだが語ること」や、「演劇やオペラ、サイコドラマなど非言語的表現や声に、注目」(倉戸「パールズの言語観と臨床」21)したが、療法に用いることばにも細心の注意を払った。倉戸は彼の主要な言語観を説明する：

(i) 例えば、「私は問題を持っている (I have a problem.)」という、自他二元論を基盤とするSVO文型で語るクライアントに、「私が問題である (I am the problem.)」と言うよう勧める。そのように発話していけば、ほかならぬ自分自身が問題であることに気づき、自身を問うことになるからである。

(ii) 「～について」という話—“aboutism”—は、堂々巡りになるため、避ける。

(iii) 「なぜ (Why)」と問い詰めてもその場限りの都合のよい答えをしたり、自己防衛的になったりして、行為の目的や原因、事態の背景をはっきりさせることにならないため、どのようなことがあってその結果がおこったか“How”で尋ねる。「事の成り行きの構造に入り込み……プロセスが明らかになると、必然的に“なぜ”」の理由がわかるからである。(21; i から iii は筆者による pp. 20-21の要約) ここから、(iii) などは、ジャックとマレイの会話にも共通する点であることがわかる。

(i) はこの療法の独特な点の一つであろう。

Dryden and Myttonによれば、カウンセリング/心理療法の4源流は、Sigmund Freud起源の「精神分析的、ないし精神力動的」療法、Carl Rogersの唱えた人間・来談者中心療法、Albert Ellisによる「合理情動行動療法」、そしてArnold Lazarusが唱えた「多面的療法」(i)である。四つには重なる面もあり、また現在も様々な方法が開発されているようだ。しかし、医療である心理療法にも、そうではないカウンセリングにも、言葉の重要性に関しては様々な方法論のあいだで共通理解があるようである。例えば、自閉症や神経性食欲不振症やうつ病を論じる李によれば、感情を表現する—「『正しく象徴化していく』—」ことで、感情が「『よりはっきりと感じられるようになる。』」「表現によって意識化が進む」と、「意識化がさらに表現を促すというように、両者は相互に促進しあう」。意識化と表現が相互に促進しあいながら、病気の原因や状態などの〈物語〉が言語のなかに現れ出てきて、表現が繰り返されるうちに、「感情そのものも分化し変容していく。」(195)精神的な問題やトラウマを抱えていた人が覚醒し、変わっていくのである。こうも説明できる。「体験に言葉を与えることによって、言葉のまわりに身体的・感情的体験が収束していく。」しかし、外傷的体験によって否定的感情が生じると、「言葉と身体的・感情的体験との結びつきが失われ」(196)、自閉症や神経性食欲不振症やうつ病など心の病が起こる。「治療の進展に伴って、言葉は、それまで切り離されていた具体的な身体行為や感情体験の記憶とのつながりを取り戻す。つまり、言葉が身体とのつながりを回復する」。そうすれば、「話し方も、ぎくしゃくして聞き取りにくかったり、機械的な、あるいは計算されたものから、自然な流れを取り戻す。」(5) 心理療法の場合は、話される言葉の内容のみならず、音調の方も大きな意味を持つこともあり、発話行為自体が重要なのである。そして、前述したように、「物語には治療的な働きがあり」、「何より、語り手も聞き手も、物語という形式を通じて混乱し断片的にしか対処できなかった出来事や対人関係の表象を、まとまりをもった一つの体験として包括的に受け取ることができる。」(北山・黒木 編 51)「治療とは新しい物語の創造」(xi)であり、「語り・聴くという行為そのものが自己を再構築していく。」(158) 強迫観念となっていた古い〈物語〉から新しい〈物語〉に乗り越えることで、自己が再構築されるのである。

ゲシュタルト療法以外の、心理療法やカウンセリングの間ではどのような言語戦略が用いられているのだろうか。例えば『臨床実践のための質的研究法入門』で、McLeodは夫婦面接における研究例として、以下を例挙する：「幾つもの発話順に渡って反応を追求する…不明確な発言を明確化する…表現の仕方を工夫し、求めている反応が返ってくるようにする…質問や潜在的な問題を挙げ、自らそれらに答える…相手の誤解や拒絶を無視し、自分の主張が受け入れられたかのように話し続ける…発話順を得るため、夫あるいは妻の話に重ねて発言する…定式化・再定式化…答えの候補を提示する…問題のテーマから解決のテーマへと話題を変えるため、ユーモアを用いる」(123-24)である。十分参考にはなるが、夫婦面接の場合ゆえ、より一般的で応用が利くと思われる

る例を挙げよう。De Jong & Bergは『解決のための面接技法 第3版』で、「知らないという技法」として、傾聴、クライアントのキーワードを繰り返す、オープン・クエスチョン、要約、言い換え、クライアントの非言語行動に注目する、自己開示、過程に注目する、コンプリメント（称賛、ねぎらい）、クライアントの見方の肯定、自然な共感、ノーマライズする、クライアントに焦点を戻す、可能性のヒントに気づく、クライアントにとっての意味を探す、関係性の質問、ソリューション・トークを増幅する、一歩後からリードすることなどを挙げている。クライアントに関する詳細な情報を得たうえで、質問を作成するが、このような技法がクライアントとの面接には必要なのである。（第3章参考）また、ミラクル・クエスチョンが有効な場合もある。「奇跡について尋ねることによって、クライアントは無限の可能性を考えることができ」、質問の焦点が将来に置かれるため、「現在と過去の問題から焦点をずらし、今より満足のいく未来の生活に目を向けさせる」（95）からである。マレイは心理療法士でもカウンセラーでもないが、列挙したこれらの事項とデリーロ小説に描かれるマレイの言語戦略に共通するものが多いことに気づく。

5. ソクラテ斯的対話、心理療法、文学の言語戦略

『ホワイト・ノイズ』の主人公Jack Gladneyはその名前が象徴するように、Glad+ ney [not] すなわち gladではない。眼前に死が立ちほだかり、平穏で楽しく充実した人生を送るどころではない。精神的病気ではないにしても、そして表面的には学者としての日常や家庭生活に大きな支障があるようには思えないが、精神的危機にあることは切迫した現実だ。ソクラテ斯的対話とは異なり、心理療法の言説と親和性が多く見出されるが、第37章においてジャックとマレイとの、日常的会話（文学言説・表現）のなかに、デリーロは主人公の気づきへの、新しい〈物語〉への帰着の最初の段階を描写した。文学的言語の戦略を用い、さらに第39章での文学的手法と言語の駆使につなげる。第37章の文学的言説の特徴として顕著なのは（1）〈物語〉到達には言葉が、物語を語ることが、そして聞き手が必要であることを示唆していること。（2）ソクラテ斯的対話あるいは「対話としてのセラピー」と言うよりは、自然な日常会話の中での気づきを示したこと。会話の自由さは多くの可能性を秘めているのだ。（3）マレイにジャックを、忘我といえるほどに興奮、憤慨させ、分節的言語や二元論言説の外部に落とすという予想外ではあるが効果的な戦術を用いたこと。（4）理論的に可能な、死の恐怖克服法を倫理的価値観とは無縁に呈示したこと。論理的思考・分析を最大限に利用したのだ。そして（5）論理的可能性の一つを選択・決定した場合、自分の行為に責任をもたねばならない状況を作り出し、全的な責任ある行為主体として自己を回復させようとしたことである。主人公の新しい〈物語〉到達を描くこの小説において、ソクラテ斯的対話や心理療法とは異なる、文学の言語戦略に読者は気づく。

物語と会話の意義については補足する必要があるだろう。精神療法のように、マレイの導きでジャックは「言葉を紡ぎ、意味を綾なすことによって、無形の“あるもの”を姿かたちのあるものとして

いく」(北山・黒木 編 18)。マレイなしでは不可能であったろう。精神療法/カウンセリングもマレイとの哲学散歩も、正体不明のその無形のもの自体が、自身が紡ぎ出す衣装をまとうて姿かたちを表す、「言語による創造的営為」である。ジャックとマレイの場合とは異なり、精神療法場面の言葉は、「一片の記号、あるいはそれを表示し伝える『音声』としてあるまえに、まずもって身体に染み入る『肉声』——“息づかい”としてあり」……「言葉は“生きた音”として響き合うものであり、発せられた言葉の意味は、制度化された記号としての概念的意味と、それを包み込むひびきやしらべといった“息づかい”が醸し出す所作の意味とが一体になったもの」(19)である。精神療法家が、クライアントの話す語調(聴覚的な感得)や発話の際の身体的動きや変化(視覚的)、感じ取れるもの(「感覚的もしくは共感的)などを重視し、手がかりとする所以である。それと比べて、マレイの言語の自律性と合理性は際立っている。精神療法/カウンセリングと文学言語の戦略との大きな違いの一つと考えられる。

モノログや対話ではなく、会話が<物語>到達に大きな影響を与えたことも両者の違いである。ここでは、会話という概念も異化される。「会話は、ただ言葉を話すだけではない。それは私たちのありかたそのものだ。」(野村 他訳 140) Andersonは続けて、会話の特徴として次の五点を挙げている。

- 1 人は必ず、日常の生活から得た、たとえば自分は誰かというような概念も含め、枠組みをもって会話に参加する。
- 2 会話は状況とともに生じるが、その状況はローカル(いまここの対人関係)なものやより広い(文化的、社会的、歴史的な)ものがある。
- 3 ひとつの会話は、過去の無数の会話と関連し、かつそれらに影響されて存在するが、未来の会話の一部となってそれらに影響を与えていく。つまり会話は単一の出来事ではない。
- 4 それぞれの参加者が目的、期待、意図を持ち寄り会話を形成する。
- 5 参加者の間で交わされる会話は、同時に参加者自身の内なる会話を伴う。(野村 他訳 140-41)

人間や事物は関係ネットワークのなかに存在し、会話はそのなかで行われる。それは単一の出来事ではなく、過去・現在・未来の時間的分節を超え、個人・コミュニティ・社会の領域を越境する。それぞれ感情や欲望などを持った参加者の内省—自身の内なる会話—を伴い、それが相互に影響を与える。<物語>と会話の構造や、内容や、発生・展開のありようは同じような相を呈するのだ。したがって会話は、人間関係と事物のネットワークのなかに生きる我々が^{life}生の<物語>を見出す、そしてそれを表現する最適の場・文脈の一つと言えよう。アンダーソンは会話を、新たな意味が出現する対話的(dialogical)会話と、そうではない独白的(monological)会話に二分しているが(141)、小説第37章の会話は前者の例であり、この小説の文学言語の戦略がその一例である。この点では、「会話」について「知ることを、科学者や哲学者によって記述されるような、本質を捉えることとして

見るのではなく、むしろ現在通用している基準に従った、信ずるための権利と見るのであれば、そのときわれわれは、会話を知識が理解されるべき究極の文脈として考え始めているのである」(野家 監訳 450) と述べた Richard Rortyに通じるところがある。彼にとっては、「会話が成立していること、マナーが保たれていること」が『正義』の証し」(渡辺 339-40) である。

会話に注目はしても社会正義の証しとまで考えるローティの哲学的言説とも、いかに文学言語は異なることか。しかし、我々は37章の文学言語の戦略が、39章でどのような展開を見せるのか、引き続き考察せねばならない。

引証文献

Anderson, Harlene. *Conversation, Language, and Possibilities : A postmodern approach to therapy*.

野村直樹 他訳。『会話・言語・そして可能性—コラボレイティヴとは？セラピーとは？』。東京：金剛出版、2001。

岩田靖夫。『ギリシア思想入門』。東京：東京大学出版会、2012。

——。『増補 ソクラテス』。東京：筑摩書房、2014。

片岡啓 他編。『生と死の探求』。福岡：九州大学出版会、2013。

北山修・黒木俊秀 編。『語り・物語・精神療法』。東京：日本評論社、2004。

倉戸ヨシヤ。「パルズの言語観と臨床」。日本心理臨床学会、『心理臨床の広場』 7-1 (通巻135)

特集1 ことば、特集2 臨床とユーモア (2014) : 20-21。

栗原彬 他編。『越境する知2 語り：つむぎだす』。東京：東京大学出版会、2000。

斉藤学。『「毒親」の子どもたちへ』。東京：メタモル出版、2015。

田中伸司。『対話とアポリアーソクラテスの探求の論理』。東京：和泉書館、2006。

De Jong, Peter and Insoo Kim Berg. 桐田弘江 他訳。『解決のための面接技法—ソリューション・フォーカスト・アプローチの手引き 第3版』。東京：金剛出版、2008。

DeLillo, Don. *White Noise: Text and Criticism*. New York: Penguin, 1998. なお、森田展男訳、『ホワイト・ノイズ』(東京：集英社、1993)を参考にさせていただいた。

Dryden, Windy and Jill Mytton. 酒井 汀 訳。『カウンセリング/心理療法の4つの源流と比較』。京都：北大路書房、2005。

納富信留。『ソフィストとは誰か？』。東京：筑摩書房、2015。

Perls, Frederick S. 倉戸ヨシヤ 監訳。『ゲシュタルト療法—その理論と実際』。京都：ナカニシヤ出版、1990。

Platon. 三嶋輝夫・田中享英 訳。『ソクラテスの弁明・クリトン』。東京：講談社、1998。

Boxall, Peter. *Don DeLillo: The Possibility of Fiction*. London and New York: Routledge, 2012.

McLeod, John. 下山晴彦 監修。『臨床実践のための質的研究法入門』。東京：金剛出版、2007。

李敏子。『心理療法における言葉と身体』。京都：ミネルヴァ書房、1997。

Rorty, Richard. 野家啓一 監訳。『哲学と自然の鏡』。東京：産業図書、1993。

渡辺幹雄。『リチャード・ローティ＝ポストモダンの魔術師』。東京：講談社、2012。

